



◎三重県第二中学校として創立、三重県立富田中学校、四日市高等女学校、四日市市立北高等女学校を1948年に統合して現校名となる。2002年に65分授業、2学期制をはじめとする改革に着手、03年にスーパーサイエンスハイスクールの指定を受ける。文武両道を目指し、部活動にも積極的に取り組む。

設立

1899(明治32)年

形態

全日制／普通科・普通科国際科学コース／共学

生徒数

1学年約360人

11年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、東京大13人、名古屋大30人、三重大40人、京大23人、大阪大23人など計243人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、南山大、同志社大、立命館大などに延べ613人が合格。

住所

〒510-8510 三重県四日市市富田4-1-43

電話

059-365-8221

Web Site

<http://www.shiko.ed.jp/>

三重県立
四日市高校

学習習慣の定着

学習記録や面談などの
手を掛ける初期指導で
信頼して学べる学校に

変革のステップ

背景

◎入学生の学力に見合った進学実績を出せなかった。部活動を辞める者も多く、学校が求心力を発揮できていなかった

実践

◎学習記録、課題の工夫などにより生徒の学習習慣の定着を促し、同時に教師の目線合わせ、進路指導の体系化を図る

成果

◎生徒が学校を信頼するようになり、教師と生徒の距離が近くなった。教師の指導力の継承がなされた

学校の求心力の低下により
進学実績が伸び悩む

三重県立四日市高校は、旧制二中の系譜を引く県内屈指の伝統校である。国公立大合格者は毎年250人前後に上り、2011年度入試でも東京大、京大、大阪大などの難関大に計100人以上が合格した。進路指導主事の中川剛先生は次のように話す。

「どの学年でも安定して実績を上げられ、新しく先生が入ってきて同じように指導できる。本校の指導スタイルがしっかりと継承されていると感じています」

同校が学校改革に着手したのは、10年ほど前のことだ。02年度、完全学校週5日制になったのを契機に65分授業と2学期制を導入し、進路指導計画の精緻化、初期指導の方法の見直しなどの諸改革を進めた。

背景には進学実績の伸び悩みがあった。95年に三重県の公立高校入試で総合選抜制度が廃止され、志望校選択の自由度が高まった。伝統校である同校には、相対的に高い学力の生徒が集まるようになったが、新入生の学力の上昇に見合うほどには大学進学実績が伸びず、地域の期待に応えきれない面があった。

また、学校の求心力が低下していたことも懸念材料となっていた。

「この地域は中学生の通塾率が高く、その

成功体験を持って高校に入学してきます。そのため、高校入学後も塾に頼りがちな傾向が見られました。塾があるからといって部活動を休んだり、2年生の秋には部活動を辞めてしまう生徒がいたりしたため、活気の感じられない部もありました」（中川先生）

家庭学習の習慣が身に付いていない生徒も多かったが、「学校は二の次」という意識があるためか、教師の指導が浸透しにくい面もあった。結果的に進学実績は伸びず、学校全体が活気を失っていったのである。



中川剛 Nakagawa Tsuyoshi
 三重県立四日市高校（1年4月から三重県教育委員会事務局教育総務室企画グループ主任）
 教職歴22年。同校に赴任して14年目。進路指導主事。「バランスの取れた学校を目指したい」



近藤健 Kondo Takeshi
 三重県立四日市高校
 教職歴23年。同校に赴任して4年目。1学年主任。「視野が広く周囲に配慮の出来る人間を育てたい」



小林正典 Kobayashi Masanori
 三重県立四日市高校
 教職歴19年。同校に赴任して5年目。2学年主任。「何事にも関心を持ち、自分の考えを表明する生徒を育てたい」



原泰孝 Hara Yasutaka
 三重県立四日市高校
 教職歴20年。同校に赴任して5年目。2学年担任。「学校生活全てに本気で取り組む中で、個性の基となる基礎をつくってほしい」

「学習計画・記録表」を段階的に運用し 学習習慣の定着を図る

同校が力を入れたのは初期指導だ。まず、入学時に「総合的な学習の時間」や学習オリエンテーションで、各教科の学習法を「学習計画・記録表」（P.20図）を用いながら指導する。そして、生徒が自ら机に向かう家庭学習習慣がしつかり定着するよう、「学習計画・記録表」の使い方の目標を細かく設定し、段階的に指導を進めていく。その方法は次の通りだ。

- 4月 家庭で学習した実績を記入
- 5月 1週間分、または連休中の短期学習計画を立てさせ、出来た部分に○を付ける
- 6月 定期考査や実力試験前に、2〜3週間単位の中期学習計画を立てさせ、達成できた部分に○を付ける

同校では、毎月、定期考査や実力試験、校外模試など何かしらのテストを行う。試験2〜3週間前に「学習計画・記録表」を配り、テストを目標として、教科や問題集の学習範囲を1日単位で記入させる。担任は、学習時間や科目の偏りをチェックし、適宜アドバイスをして返却。生徒は毎日、計画に対して実際の学習時間を記入する。試験終了後には再度、担任が集めて達成状況をチェックする。

計画がうまく立てられない生徒には、手本となるような「学習計画・記録表」を見せて参考

にさせる。2学年担任の原泰孝先生は次のように述べる。

「本校の生徒は、友だちに負けたくないという気持ちが強くあるようです。他の生徒の学習法を見て、自分も同じようにやってみようと思う生徒は多いと思います。基礎問題に力を入れている生徒、同じ問題を繰り返し解く生徒など、さまざまな方法を見せるうちに、試行錯誤しながら自分なりのスタイルをつくり上げていくのです」

どのようにしたら生徒一人ひとりに家庭学習の意義が効果的に伝わるかも重視している。2学年主任の小林正典先生は次のように指摘する。

「自分に合った学習法をつかめていない生徒が多い中で、『1日3時間は勉強しないとだめだ』といくら声を大にして言っても、生徒は自分に向けられた言葉として受け取れません。面談などで生徒と向き合う場面を増やし、『学習計画・記録表』を基に個に応じた指導をすることで、意欲を高めて学習習慣の定着につなげていくことが出来るのです」

生徒の状況に合わせて 課題の出し方を工夫

計画的な学びを支援するため、週課題の出し方も工夫した。課題提出日を、月曜は英語と物

*プロフィールは取材時(2011年3月)のものです

るからこそ、安心して指導に当たれる。その結果、安定した進学実績を積み上げることが出来たのだと思います」（小林先生）

時期ごとに面談の意義を明確にし指導を標準化する

面談は単なる雑談や教師からの一方的な注意で終わらないよう、1年生の4月は「相互理解」、6月は「学習習慣の確立」、9月は「選択科目の決定」というように、時期ごとの目的を明確にしている。更に、担任の力量や経験によって指導に差が生じないように、面談ごとに目的や内容、方法などをプリントに明記して担任間で共有し、面談の質と内容の標準化を図った。

例えば、1年生6月の面談では「中間試験において成績が芳しくなかった生徒や、スタディーサポートで学習習慣が付いていないという結果の出た生徒を中心に」という目的を明示。その上で、生徒の状況をつかむために「生徒の話に耳を傾ける」「生徒の話を整理する」「生徒の問題点を考える」ことの重要性を述べ、「生徒に具体的なメッセージを出す」「長々と方法論を語らない」など進路指導部が中心となって具体的な手法を示す。

進路指導計画と同様、ノウハウを記したプリントも次の学年へと引き継ぐが、前学年の内容を全て踏襲する必要はない。その時々

の状態や課題に応じて変えていくことで、より効果が高まると同校は考えている。

「全てを押し付けてしまうと、先生方の意欲は高まりません。方針は統一しながらも、方法は学年に任せる。このバランスをうまくとることで、取り組みを形骸化させることなく効果的に運用できるのです」（中川先生）

「学力検討会」により学年の機動力が高まる

指導計画やノウハウの標準化は重要だが、それに頼り過ぎると生徒の変化への対応がおろそかになる。同校では月2回の「学力検討会」で、その時々

の課題について共有することによって、学年の機動力を担保している。メンバーは、学年主任、学年の進路・教務担当者、国数英理地歴公民の教科担任だ。主に1か月半〜2か月後の指導計画、スタディーサポートと模試の結果共有などがテーマとなる。先述した週課題の教科間での調整、面談内容の明示なども、この会議で発案・決定された。

「1か月後にインターハイの予選があるのので各教科の課題量を抑えよう」「英語を強化したいので他教科の課題を減らそう」というように、教科の枠を超え、生徒の状況に応じて柔軟に学習指導を修正できるように組み立てた。また、検討会の時間は業務時間内に組

み込み、毎回メンバー全員が参加できるようにしています。取り組みが意味のあるものとして継続するためには、学年にかかわる全ての教師が責任感を持って指導に臨むことが重要で、それを実現するためにも真剣に討議する場は不可欠です」（近藤先生）

教師の手厚い指導により、生徒が学校に寄せる信頼は徐々に高まっている。自ら面談を希望する生徒や夏季講習の出席者は増え、通塾率は大幅に低下した。教師のアドバイスに耳を傾ける生徒が増えたことで、1年生から高い志望を持つ生徒も多くなった。

日常的にコンセンサスを取ることで教師の一体感が増したのも大きな変化だ。部活動顧問も学年の取り組みに理解を示し、生徒の課題の提出状況や試験の成績まで把握するようになった。部活動顧問と担任間の意思疎通が円滑になったことで部活動も活発になったという。

「生徒に文武両道を求めるのなら、学校がそれを実現できる環境を整えることが大切です。先生方の手厚い指導により、生徒も学習と部活動の両立に自信を持てるようになったのではないのでしょうか」（中川先生）

今後の課題は、大学に入ってから学びやその後の就職など、高校卒業後を見据えた情報提供をしっかりと行っていくことである。単に大学に合格するだけでなく、その先の将来も見通した指導を追求していくという。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年9月号指導変革の軌跡「島根県立益田高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)